2026 ヒロシマ市民の描いた

原爆絵画展

1974 年一人の被爆者が描いた被爆体験の絵画をきっかけに、多数の被爆体験の絵画が集められました。現在では広島原爆資料館に 4000 点以上の絵画が所蔵されています。これらの絵画はヒロシマ市民の手による原爆被害の記録であり、核兵器のもたらすものを現代に生きる私達に訴えかけてきます。本展では絵画数十点を展示します。

場所：所沢市役所1階　市民ギャラリー
（航空公園駅東口徒歩3分）

日時：8月5日（水）～7日（金）

午前9時～午後5時（5日は午前11時から、7日は午後4時まで）

連絡先：「所沢りぼん法律事務所」04-2938-1012

※専用駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用下さい。
※選挙等により中止または期間が変更になることがあります。

主催：原爆絵画展所沢実行委員会
後援：埼玉県・埼玉県教育委員会・広島市・長崎市
所沢市・所沢市教育委員会・所沢市社会福祉協議会
入間市・狭山市・丸木美術館・NHK さいたま放送局
テレ玉・ＦＭ ＮＡＣＫ５・埼玉新聞社
朝日新聞さいたま総局・毎日新聞さいたま支局
東京新聞さいたま支局・琉球新報社
※現時点で申請中の団体もございます。

・入場無料・

展示される絵画は毎年異なります。
以前ご来場の方も、新しい絵画をご覧になれます。

会　場　案　内

原爆絵画展へのメッセージ

埼玉県原爆被害者協議会（しらぎぎ会）　髙橋　溥

八十一年前の八月のあの日、夏の青い空から太陽が降ってきた。
一瞬白い光、太陽の中に包み込まれたかのような強烈な光、物の形は白い色に消えた。その時、ヒロシマは平らに、灰色の原野となったのです。私は、私たちはあの残酷・酸鼻の地獄を脳の中に刻み被爆者として生きることになりました。人類の歴史は、かなしいことですが、争いの歴史でした、その到達点が原爆・核兵器です。あの惨劇・惨禍の体験者として、あの地獄は二度とあってはなりません。
核を使う一度の過ちは、世界すべてが生き終わるリスクと隣合わせなのです。

「戦争の反対は平和じゃなく日常なのだと私は思うのです。戦争ってね、日常がないということだから」中村桂子朝日新聞・折々のことばから

「アジアの田舎」を尋ねる機会がありました、中国・台湾・タイ・ベトナム・ミャンマー・ブータン・チベット。中国の少数民族・タイ族の村では桃源郷かと思う体験がありました。ブータンでは小川で分かれたインドとの国境を体験、村人は関係なく行き来しています。
ヨーロッパの福祉先進国、スエーデン・デンマークも尋ねました。生まれて死ぬるまで安心して生きることのできる社会、豊かな日常があります。

NPT（核不拡散条約）・TPNW（核兵器禁止条約）、そして憲法九条これらは一般市民の穏やかな日常生活の実現のための約束でなくてはならないのです。

※埼玉県原爆被害者協議会（しらさぎ会）は、埼玉県在住の被害者の会で、2024 年ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の構成団体です。